

八代焼（高田焼）

八代焼と象嵌（ぞうがん）

象嵌って

象嵌は、作品のもととなる生地（きじ）に、ことなつた材質（ざいしつ）を埋め込んで文様（もんよう）を表現する、工芸（こうげい）の技術です。金属、木、陶磁器（とうじき）と、いろいろな分野の工芸に用いられています。熊本の伝統工芸品として有名な肥後象嵌（ひごぞうがん）*は、鉄地に金や銀をうめこんだものです。

八代焼（高田焼）では、緑がかった地に、白や黒で文様を表現しています。白は白土を、黒は鉄分の多い赤土を使ったものです。八代焼の象嵌は、江戸時代から全国的に知られていました。

* 肥後象眼では、伝統的に「眼」の字を用いますが、意味は「象嵌」と同じです。

象嵌の技法

象嵌の手順は次のとおりです。

- 1 まず、粘土（ねんど）で、器の形を作ります。
- 2 数日たって、なまかわきの、まだやわらかさのある時に、ヘラで文様をきざみこみます。
- 3 きざみこんだ文様の溝（みぞ・くぼみ）に、白土や赤土をうめこみます。この作業は、数回、くりかえし行います。
- 4 文様からはみだした土をけずりとして、表面を整えます。
- 5 素焼（すやき）をし、さらに釉薬（ゆうやく・うわぐすり）をかけて、焼きあげて完成です。八代焼は緑がかった色をしています。これは木を焼いて作った釉薬（木灰釉・もくばいゆう）に含まれる鉄分が発色したものです。

象嵌の歴史

江戸時代の八代焼は、今から350年ほど前（17世紀の前半）に、豊前国上野から八代に移り住んだ上野焼の職人を中心にはじめられました。この人々に、指導

を与えたのは八代城主で、茶道の名人、千利休の弟子としても知られた細川三斎でした。

当時の茶道の世界では、朝鮮半島の陶磁器(とうじき)にとっても人気があり、大切にされました。高麗(こうらい)や、そのあとにおこった李王朝(りおうちょう)の作品には、象嵌をほどこした、すぐれた作品が、たくさんふくまれていました。

上野焼の職人は、朝鮮半島から海を渡って日本に移り住んだ人々です。また、焼き物を必要とした茶道の世界でも、象嵌の作品に人気がありましたから、八代焼では、17世紀前半の、その始まりのころから、象嵌文様の作品が焼かれています。

《牡丹・ぼたん文様に見る時代による象嵌の特徴》



初期(17世紀)の象嵌

李王朝時代の朝鮮の象嵌に見られるような、素朴(そぼく)な表現が見られます。



中期(18世紀)の象嵌

力強く、絵画的な表現です。こまかいところにとられず、だいたんな文様となっています。



後期(19世紀)の象嵌

象嵌の技術は、18世紀の末には、最高のものになります。19世紀の中ころには、現代のものに近い作品が、数多く焼かれています。

これらの作品は、細川藩の命により、図案、大きさ、色合いなど、きびしく管理されて制作されました。そのため、作品の仕上がりは完全ですが、美術品としての面白みには欠けているようです。高麗の象嵌青磁(ぞうがんせいじ)に似ています。